近年のホスティン・ボラグ遺跡(匈奴の生産址遺跡群) の調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47107

近年のホスティン・ボラグ遺跡 （匈奴の生産址遺跡群）の調査

臼杵勲（札幌学院大学）
笹田朋孝（愛媛大学）
木山克彦（東海大学）

Ⅰ. ホスティン・ボラグ遺跡の概要と調査の歴史 (図 1, 図 2)

ホスティン・ボラグ遺跡 (北緯 48° 01′ 49.8″, 東経 108° 26′ 53.5″) はトゥブ県（アイマク）ムングンモリト郡（ソム）に所在し、モンゴル高原北部を南流するヘルレン川（ゴル）の支流であるズーン・バイトラグ川（ゴル）の北岸の河岸段丘上に位置している。台地の縁辺部に東西 240m ×南北 50m の範囲で、鉄鉱石や鉄滓、炉壁などが散布している。遺跡の位置する段丘上には、ヘレクスル、板石墓、石人や突厥の祭祀遺構などが確認されている。またエルデネ・ゾー寺院やガンダン寺と並び称されたズーン・フレー寺院もこの段丘上に位置している。

匈奴の遺跡について言えば、周辺には匈奴の一般墓が確認されており、我々の調査チームもナムスライン・オハー遺跡 (Намсрайн ухаа) の匈奴の一般墓を 2 基発掘調査している。調査エリアから北北東へ 35㎞の地点には匈奴の土城であるテレルジ土城 (Тэрэлжийн дөрвөлжин) があり、 1 辺 200 m以上の方形の土塁が巡る。城内の発掘調査が行われており、複数の基壇建物とそこで使用された瓦や文様磚が基壇建物の周辺で見つかっている [1]。また、遺跡から北北東へ 25㎞の地点にブルフ土城 (Бүрхийн дөрвөлжин) が、南へ約 20km の地点にはフレート・ドブ土城 (Хүрээт дов) が位置し、さらに南にはウンドゥル・ドブ土城 (Өндөр дөв) やゴア・ドブ土城 (Гуа дөв) が位置している。

1990 年にモンゴルと日本の共同研究プロジェクト「ゴルバン・ゴル」によってズーン・バイトラグ川（ゴル）流域の踏査が実施され、報告された数多くの遺跡の中にホスティン・ボラグ遺跡 (旧石器時代の石器や匈奴の窯跡など) が報告された [2]。そして 1999 年にモンゴルと韓国の共同研究プロジェクト「Mon-Sol」によってこの匈奴の窯跡の発掘調査が実施された [3]。2010 年 5 月にモンゴル科学アカデミー考古学研究所の研究員 Ch. アマルトゥブシン、G. エレグゼン、N. バトボルド氏らがスラグの散布を確認し [4]、同年 6 月にはモンゴルと日本の研究者らがホスティン・ボラグ製鉄遺跡の現地踏査を行った。そして 2011 年に愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターとモンゴル科学アカデミー考古学研究所 (当時) との間で研究協定 (プロジェクト名 “History of Mongolian Metallurgy”) を締結し、ホスティン・ボラグ遺跡の発掘調査を開始した。2014 年には研究協定を更新し、プロジェクト名を ”History of Mongolian Craft Production” とし、現在に至っている。

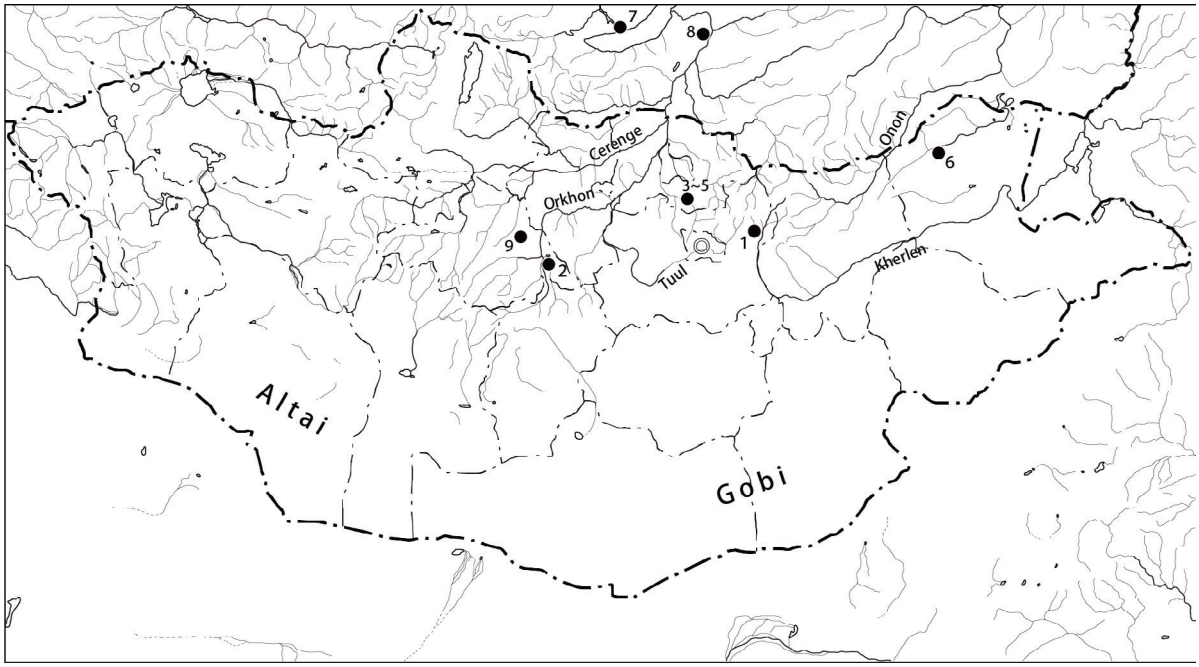
遺跡の調査では複数のチームを組織し、一般踏査、民族調査、地質調査、窯址の発掘調査、墓の発掘調査、製鉄地点の発掘調査などを行ってきた。まず、一般踏査、民族調査、地質調査について簡単に報告し、その後、製鉄地点の発掘調査について重点的に記述したい。

一般踏査では、衛星写真を利用し踏査の範囲を 140km^2 に設定し、これを 2km 四方のグリッドで 35 カ所に分割して踏査した。人海戦術で調査エリアを踏査し、300 を超える遺跡や遺物の分布を明らかにした。また一定単位ごとにボーリング調査や試掘を実施した結果、製鉄地点の北西数百ｍの地点 (標高では 20 ｍ上) で土器片やスラグの散布している地点などを発見している。

共同研究者のアマルトゥブシンは、エギーン・ゴル遺跡 (Эгийн гол)[5] やハヌイ・ゴル遺跡 (Хануй гол)[6] で報告されているよう遊牧民のセツルメント、この地域でも明らかにする手掛かりになると考えている。

製鉄地点で使用された良質な鉄鉱石の産地を探すことを目的として、周辺地域の地質調査を実施した。現時点ではズーン・バイトラグ川（ゴル）流域では良質な鉄鉱石の産地は確認されていない。出土した鉄鉱石の成分分析から判断すれば、ヘルレン川（ゴル）の東側に位置するイフ・ゴタイン・ゴル鉱山やベルギーン・オボー鉱床の鉄鉱石が一番の候補として挙げられる。

民族調査では周辺の遊牧民のゲル (56 戸) を訪ね歩き、失われつつある地名や習俗の聞き取り調査を実施した。また、その際に我々の調査活動を周知するとともに、鉄滓や鉄鉱石の散布地の情報収集 を行った。民族調査中に遊牧民の子供たちから崖下のモンゴル墓 (崖墓) の情報提供を受け、緊急調査を



1. ホスティン・ボラグ　2. バガ・ナリーン・アム　3. ボラギーン・アム　4. ノヨン・オール　5. ボロー　6. ズーン・ウリーン・アダク　7. ブル・ドゥルン　8. イヴォルガ　9. ハヌイ・ゴル　◎ : ウランバートル (モンゴル国の首都)

図 1　関連する遺跡

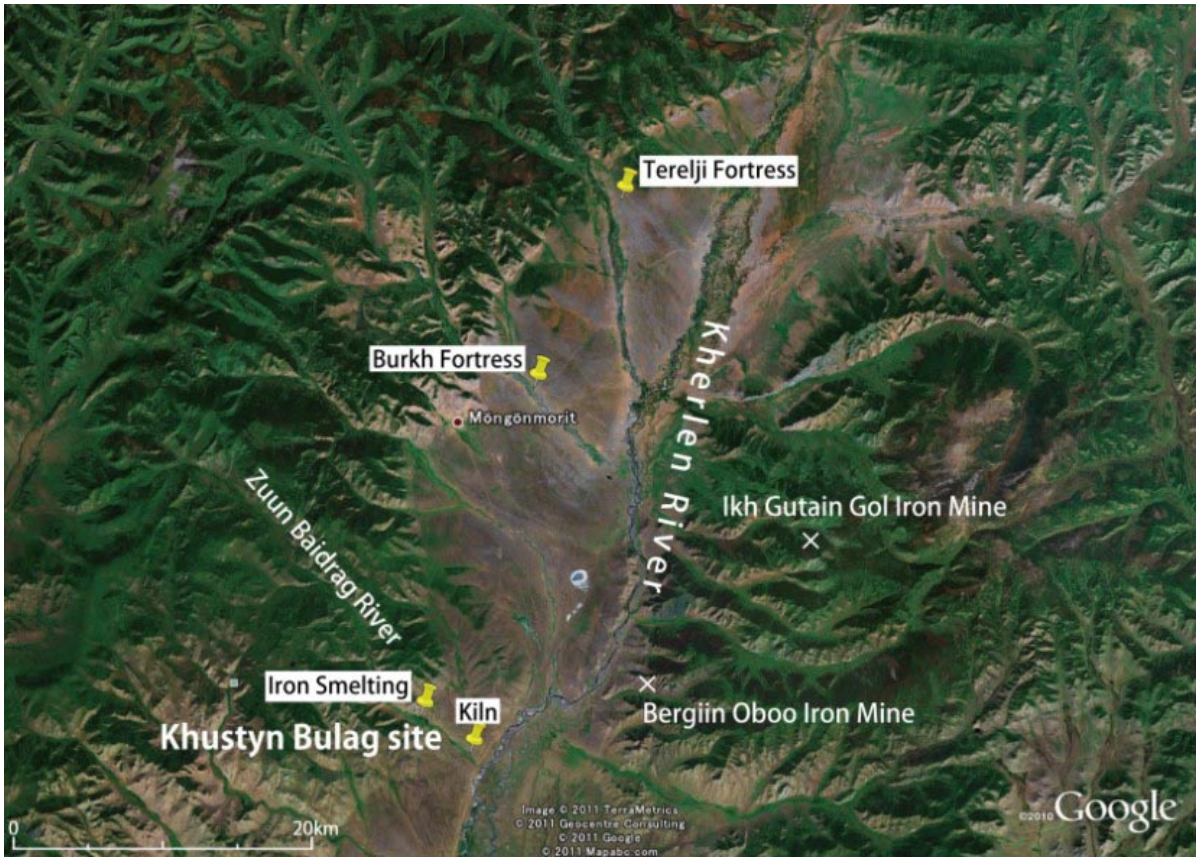


図 2　ホスティン・ボラク遺跡とその周辺の遺跡や鉄鉱山

実施した。衣服や木製の鞍などの副葬品が見つかっている。人骨の C^{14} 年代測定結果は 2σ で 1218 - 1268 cal AD(95.4%) を示していることから、モンゴル帝国時代の初期の墓である。資料は考古学研究所で保管している。

Ⅱ．製鉄地点の発掘調査

１．製鉄地点（ホスティン・ボラク１遺跡）の調査

ズーン・バイトラグ川（ゴル）の左岸段丘上、地形が草原から山地へと変わる谷の入口に製鉄遺跡が立地している。段丘の縁辺部に東西 240m ×南北 50m の範囲で鉄鉱石や鉄滓、炉壁が散布している (図 3)。モンゴルで初めて見つかった製鉄遺跡であり、2011 年～ 2016 年の調査で、製鉄炉 9 基、焙焼炉 2 基、廃棄土坑 7 基が確認され、スラグ、炉壁片、土製羽口など製鉄に関連する資料が数多く出土している。

①製鉄炉

製鉄炉は C^{14} 年代測定の結果と層位的な観察所見から 2 つの時期に分けられる。第 1 期はおおよそ紀元後 1 世紀、第 2 期は紀元前 1 世紀 (あるいはそれ以前) の年代が与えられている。

第 1 期の製鉄炉は 4 基 (1 号・4 号・5 号・7 号製鉄炉) 確認されている。これらは、ほぼ同じ炉形をなしている。第 2 期の製鉄炉は 5 基 (2 号・3 号・6 号・8 号・9 号製鉄炉) 確認されており、構造的な特徴から二つのタイプに分けられる。そのため、現時点では 3 つのタイプの製鉄炉がこの遺跡から見つかっている。

タイプ１ (図 4)：約 50㎝四方の小さな方形の土坑とやや幅広の楕円形ないしは隅丸方形の土坑 (約 200cm × 100cm) という二つの部分で構成されている。小さな土坑は深さ 30 ～ 40cm のスラグピット (slag-pit) であり、この上に製鉄炉が構築された。一方、大型の土坑は鉄滓や炉壁や羽口などで充填されており、炉外流出滓が確認されないことから排滓場ではなく、廃棄土坑であると考えられる。1 号製鉄炉、4 号製鉄炉と 5 号製鉄炉の 3 基の製鉄炉は、焙焼炉を中心に一定の間隔を置いて放射状に配置されている。

タイプ２ (図 5)：2 号製鉄炉は、大きな方形のスラグピット (約 100 × 50cm、深さ 30 ～ 40cm) を有している。タイプ 1 のような廃棄土坑は隣接していない。スラグピット内にはピットをほぼ充填するほどの大きなスラグが生成している。このスラグの下位には木炭では無く、灰が確認されていることから、操業開始時にはスラグピット内は木や枝、葉などで充填されていたと推測される。

タイプ３ (図 6, 図 7)：製鉄炉と廃棄土坑がトンネルでつながっているタイプである。8 号製鉄炉を例にすれば、隅丸長方形の土坑 (図 7 の左側の土坑、東西 80cm ×南北 50cm, 深さ 45cm) がスラ



図 3　鉄滓の散布範囲



図 4　タイプ１の製鉄炉



図 5　タイプ 2 の製鉄炉

グピットを持つ製鉄炉本体で、南側の隅丸長方形の土坑が廃棄土坑 (図 7 の右側の土坑、東西 110cm ×南北 65cm, 深さ 44cm) であり、それらを繋ぐトンネルが確認されている。

②焙焼炉 (図 8)

焙焼炉は 2 基確認されており、おおよそ方形 (60cm × 80cm、50cm × 60cm) である。土坑の中は 1cm 角前後の鉄鉱石の破片と木炭、灰、そして鉄鉱石の脈石で充填されており (図 8)、土坑の底面は比熱して赤くなっていた。サンプルの冶金学的、鉱物学的な分析結果から、磁鉄鉱が焙焼されていたことが明らかとなった。また地質調査の結果から、ズーン・バイトラグ川 (ゴル) 流域では良質な鉄鉱石の産地は確認されていない。出土した鉄鉱石の成分分析から判断すれば、ヘルレン川 (ゴル) の東側に位置するゴタイン・ゴル鉱山やベルギーン・オボー鉱床の鉄鉱石が一番の候補として挙げられる (図 2)。

③出土遺物

製鉄地点では人工遺物の出土数が極めて少ない。遺跡や遺構の時期を決定する土器の出土も少なく、わずかに匈奴の土器が数点出土している程度である。また、モンゴルの遺跡を発掘するとイヤと言うほど出土する動物骨もほとんど出土していない。そのような中で出土している資料は、石器、土製羽口 (図 9)、炉壁片 (図 10)、そしてスラグである。つまり鉄生産に関連する資料しか出土していない状況である。スラグはすべて製錬の工程で生成するスラグで、鍛冶工程で生成するスラグ (鍛冶滓) はこの地点では確認されていないことから、この地点ではもっぱら製錬工程が行われていたと推測される。

これまでの成果をまとめると、この遺跡では、原料には焙焼した磁鉄鉱を、燃料には木炭を使用して、粘土で構築されたスラグピットを持つ方形の炉



図 6　タイプ 3 の製鉄炉①



図 7　タイプ 3 の製鉄炉②



図 8　焙焼炉内に残る鉄鉱石の破片

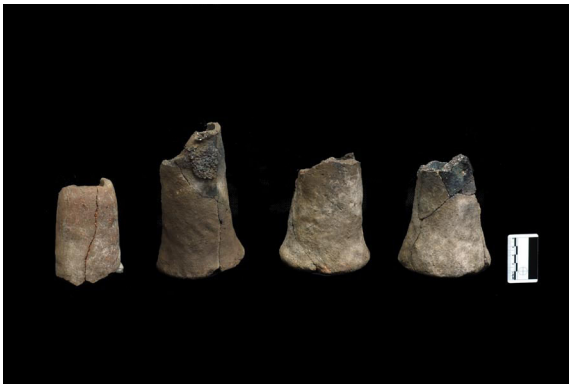


図 9　土製羽口



図 10　炉壁

で土製羽口を使って送風し、直接製鉄法で鉄 (Bloom Iron) が生産されていた。そして、製錬工程しか行われておらず、生産された鉄は “ どこか ” へ運ばれ、“ どこか ” で鉄器の材料として使用されたと考えられ、一定の分業が行われていたことを指摘できる。

２．周辺地域の製鉄との比較

２− １．南シベリアの製鉄

ロシア連邦ハカス共和国やトゥバ共和国などの南シベリアでは、かつては Y. スンチュガーシェフが調査・研究を進め[7]、近年では村上恭通らが現地で精力的に調査・研究を実施している[8]。

村上らの研究によると、トロシュキノ・イユス遺跡 (図 11) ではタシュティク文化期の製鉄炉が 6 基調査されている。いずれも方形の製鉄炉に楕円形の廃棄土坑が伴うタイプ 1 の製鉄炉で、土製の羽口が出土している。一方、トルチェヤ遺跡 (図 12) では紀元前後の年代が与えられる、トンネルを持つタイプ 3 の製鉄炉が 10 基以上調査されている。タイプ 3 からタイプ 1 への移行はホスティン・ボラグ遺跡と同じ様相を示している。しかし、大きな土坑に複数の製鉄炉がトンネルでつながっている点でホスティン・ボラグ遺跡とは異なっており、後述するバイカル湖西岸の製鉄炉と類似している。

なお、6 世紀以降には 2 つのタイプの製鉄炉が報告されており、いずれもトンネルが無くなり、製鉄炉の構築に石を補助的に用いる特徴が現れ、羽口を使用した痕跡がみられなくなる[9]。

２− ２．バイカル湖周辺の製鉄

バイカル湖西岸では、イルクーツク工科大学の A. ハリンスキー教授によって数多くの製鉄遺跡の調査が行われている。バルーン・ハル谷では 15ha の範囲にスラグが散布しており、地中レーダ探査の結果から数多くの製鉄炉の存在が指摘されている[10]。様々な時期の製鉄炉が調査されている中で、匈奴と併行する時期のエルガ文化 (紀元前 2 世紀〜紀元後 4 世紀) の製鉄炉も調査されている[11]。図 13 はブル・ドゥルン遺跡の製鉄炉で、放射性炭素年代 (未較正年代) は、炉の底部が 1915 ± 35、ピットの覆土が 2050 ± 35BP であった。この時期の製鉄炉は小さく、しかもそれぞれの炉から延びるトンネルが大きな不定形の土坑へと繋がっている。そして、土製羽口は出土していない。

バイカル湖東岸・南岸のロシア連邦ブリヤート



図 11　トロシュキノ・イユス遺跡の製鉄炉



図 12　トルチェヤ遺跡の製鉄炉

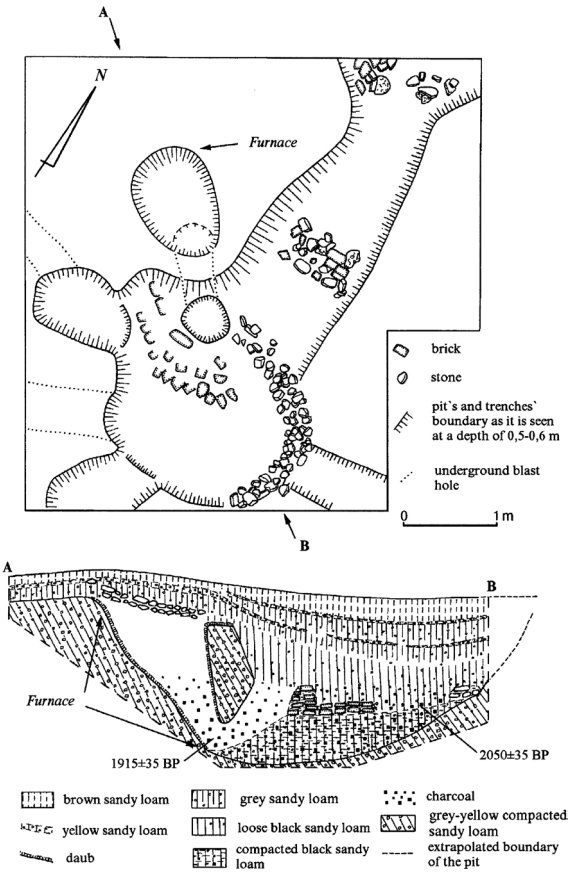


図 13　ブル・ドゥルン遺跡の製鉄炉

共和国では、ウラン・ウデ近郊に所在するイヴォルガ城址では「溶鉱炉」が報告されている [12]。これはトンネルを持つタイプの製鉄炉である。2016 年 3 月にブリヤート国立歴史博物館やロシア科学アカデミーシベリア支部ブリヤート科学センターモンゴル・仏教学・チベット学研究所で資料調査を行い、イヴォルガ土城やイリモヴァヤ・パディ遺跡などで土製羽口やスラグが出土していたことを確認している。

2－3．中国・中原地域の製鉄

中国・中原地域の漢代の製鉄の特徴は、磚 (レンガ) で構築された高炉で操業を行い、スラグを炉外に排出するだけでなく、間接製鉄法で銑鉄を炉外に流し出していたことである (図 14)。これは匈奴の製鉄では、炉の下部に穴を掘ってそこに鉄滓を貯め、操業後に炉壁を壊して炉内に生成した鉄を取り出していたことと大きく異なっている。

2－4．まとめ

このように匈奴の製鉄技術は中国の影響を受けたものではなく、南シベリアや西アジアに系譜を辿ることのできる製鉄技術であることが明らかである。モンゴル国内ではホスティン・ボラグ遺跡以外に、ウブルハンガイ県 (アイマク) バガ・ナリーン・アム遺跡 [13] や 2016 年 7 月に筆者らが調査したセレンゲ県 (アイマク) ボラギーン・アム遺跡 [14] で製鉄炉が確認されている。いずれもトンネルを持つタイプの製鉄炉であり、匈奴が独自に鉄生産を行っていたことが明らかとなっている。

一方で匈奴の鍛冶活動 (鉄器生産) を示す資料は極めて少ない。しかし近年いくつかの興味深い報告がなされている。その一つがアメリカ隊によるアルハンガイ県 (アイマク) ハヌイ・ゴル遺跡で実施されている調査である [15]。青銅器時代と匈奴のセツルメント・パターンを調べるために一定のエリアの悉皆踏査を行い、一定の間隔でボーリングを実施することで、遺物の散布地を確認している。その結果、炉はまだ見つかっていないが、いくつかの地点でスラグの散布が報告されている。論文中のスラグのカラー写真を見る限りでは、これらのスラグは鍛冶滓であり、しかも鍛冶の最終工程で生成するガラス質のスラグに類似している。

セレンゲ県 (アイマク) ボロー遺跡でもスラグが確認されている [16]。ボロー遺跡は大型の匈奴の貴族墓が調査されたノヨン・オール (ノイン・ウラ) 遺跡の北西 40km に位置する集落遺跡で、オンドル (炕) を持つ竪穴住居が発掘されたことで有名である。スラグの写真を見る限りでは、大型の木炭痕を残す製錬滓、鍛冶炉の炉壁が溶融した黒色のガラス質滓



図 14　中国の製鉄遺跡と漠北の製鉄遺跡 [18]

(左下 : 四川省古石山遺跡　右下 : 河南省古滎鎮遺跡)

が見られる。おそらくは不純物を含む粗鉄が集落内に持ち込まれて、鍛冶が行われた結果と考えられるが、鍛冶工程でよく生成する椀型の鍛冶滓や鍛造剥片などは報告されていない。山を挟んで反対側には、2015 年に発見されたボラギーン・アム製鉄遺跡が位置しており、鉄生産の一連の工程をトレースできる可能性を秘めている。

このような資料を丹念に集めて、調査を行っていくことで鍛冶炉などの鉄器製作址の発見につながっていくことが期待される。

今から二千年前にすでにモンゴルの遊牧民は独自の製鉄技術を保持していた。そして近隣の鉱山から原料である鉄鉱石を採取し、周辺の森林から燃料である薪や木炭を入手していた。基本的にはモンゴル草原内で一連の鉄生産活動を完結させていたと考えられる。ホスティン・ボラグ遺跡の発見以来、すこしずつではあるが、スラグの散布などが報告されるようになってきている。ブリヤート共和国の匈奴の遺跡の様相から考えても、モンゴル国内でも匈奴の拠点的な地域では鉄生産が行われていた可能性が高いと考えられる。

３．製鉄技術の伝播と地域的適応

製鉄には原料である鉄鉱石、燃料である木材、そして炉壁でかつ造滓剤を兼ねる有用な粘土など、様々な条件をクリアする必要がある。とくに燃料となる木炭が大量に必要とされるため、草原地帯では森林資源の確保が大きな課題となる。その一方で、北方青銅器に代表される青銅器文化の伝播を考えると、大航海時代以前における、草原地帯の卓越した情報伝達のスピードを意識せざるを得ない。これらの条件を満たすエリアは、草原と森林の境界地域である。つまりステップルートを製鉄が伝播しながら、飛び石のように森林資源をもつ境界エリアに製鉄が定着していくモデルを想定することができる。

匈奴の製鉄は中国ではなく、西アジアや南アジアに系譜を辿ることが可能である。しかし、細かく見ていくと土製羽口の有無や製鉄炉と廃棄土坑の関係など、それぞれに差異がみられる。ホスティン・ボラグ遺跡では一つの遺跡内でも複数のタイプの炉が確認されている。紀元後 1 世紀の製鉄炉と紀元前 1 世紀の製鉄炉には構造上の差異が認められる。これが何に起因しているかは不明である。また、下層では二つのタイプの製鉄炉が確認されている。このことからある時期には複数の系統の製鉄技術が存在していた可能性を示唆している。まだまだ議論を始めるには資料が少ないが、単純に西から東への伝播ではなく、試行錯誤や取捨選択をしていきながら製鉄が地域に根付いていったことを想定しておくべきである。

４．展望として

匈奴の鉄生産を通覧すると、遅くとも紀元前 1 世紀には生産システムとしてすでに完成していたことが指摘でき、このことはきわめて重要な意味を有している。言い換えれば、技術導入・試行錯誤の段階は既に過ぎているのである。おそらくはモンゴルの初期鉄器時代段階 (チャンドマニ文化など) には、すでに鉄生産が西から伝播し、モンゴルの社会や環境に適応する形で展開していったと推測される [17]。専門性が高く、非遊牧的な要素を強く持つ鉄生産を遊牧国家である匈奴が一定期間システマティックに保持しえたことは、今後、遊牧国家の成熟性 (複雑性) を考えるうえで重要なファクターとなってくると言える。

Ⅲ．竪穴状遺構・窯址調査について

上記のようにモンゴル・韓国調査隊による土器・瓦窯址が発掘調査され、笹田氏によって製鉄地点が調査されるに至り、この周辺一帯が匈奴時代の大規模な工房址群であったことが明らかとなってきた。2012 年度から周辺の踏査を実施し、窯址群の存在を確認したことから、2014 年度から匈奴時代の工房群の実態と匈奴の生産体制の解明を目的としたモンゴルとの共同調査を実施することとした。対象としたのは、製鉄地点と同じくズーン・バイダルガ川（ゴル）左岸段丘に位置し、製鉄地点よりヘルレン川（ゴル）側に 4 km の地点である (図 2)。製鉄工房はホスティン・ボラク 1 (図 15 の KBS1)、窯址群についてはホスティン・ボラク 2 (図 15 の KBS2)、ホスティン・ボラグ 3 (図 15 の KBS3) と呼び分けている。

1．ホスティン・ボラグ２遺跡における竪穴状遺構の調査

ホスティン・ボラグ２遺跡では、所々に段丘崖面の崩落面に炭化物・焼土の堆積が認められる。周囲からは、匈奴時代の瓦片・土器片も出土し、窯址で

ある可能性が高いと考えられた。

このような炭化物・窯壁体片・瓦片を多量に含む幅約 3 mの竪穴状の遺構断面は、100m ほどの広がりを持ち、複数地点確認された (北西から K1 ～ K5 と呼称)(図 16)。モンゴル・韓国調査隊が 1999 年に窯址を調査した地点から東へ約 700m の地点となる。

2014 年度は、このうちの K1 を調査地点として発掘調査を実施した。結果としては、K1 は窯址ではなく、日干し煉瓦敷の出入口を伴う竪穴状遺構であることが判明した。同遺構は、調査区内で半分以上発掘した状態となっており、その規模や構造を把握することができる (図 17、18)。

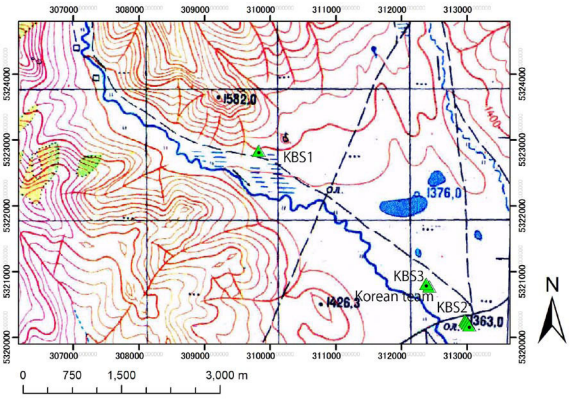


図 15　ホスティン・ボラク遺跡群



図 17　竪穴状遺構写真（南から）

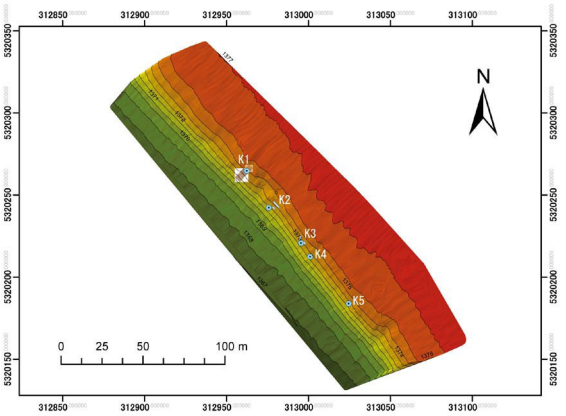


図 16　ホスティン・ボラク 2 遺跡

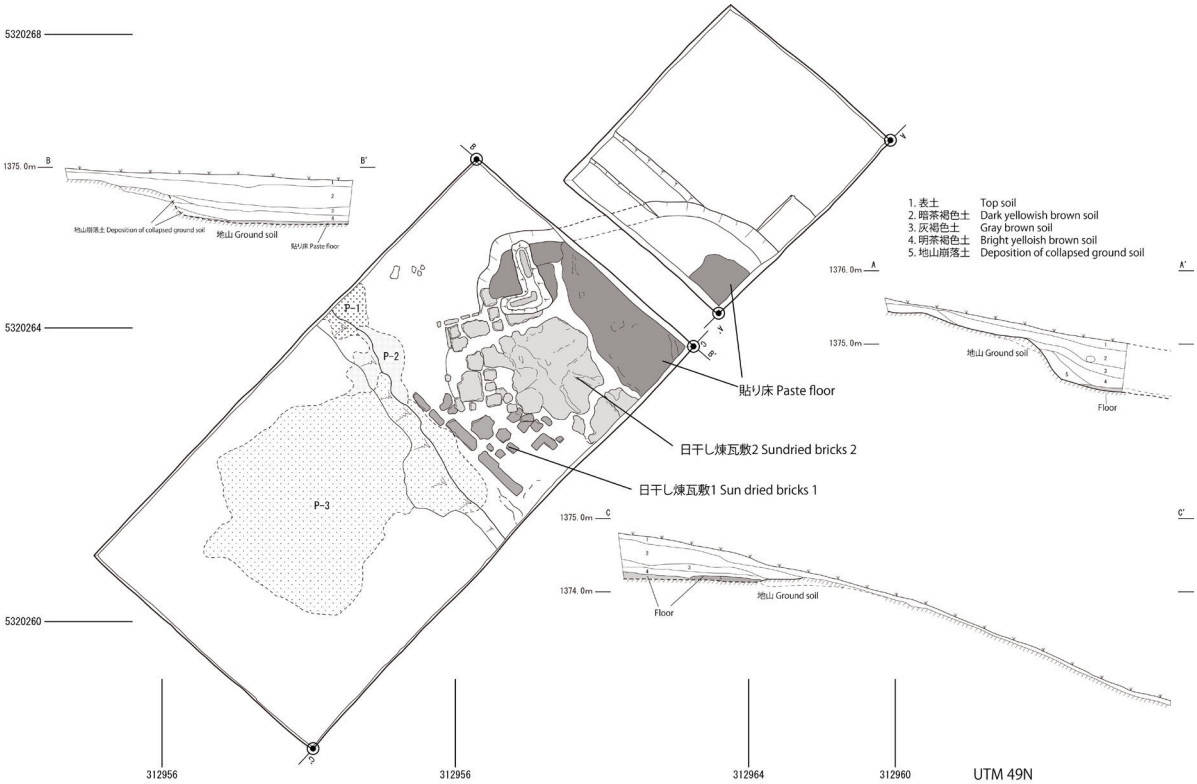


図 18　竪穴状遺構平面図

平面形は隅丸方形、調査区内で、南北 4 m、東西 3.8m の規模を持つ。主軸は南北方位である。段丘縁の緩斜面を削平して構築している。斜面上部側 (北側) で 60 ～ 30㎝の掘り込みを持ち、斜面下部 (南側) では 10㎝程度の掘り込みを有している。地山を利用した床面は南北方向で緩く傾斜するが、東西方向、南側では、ほぼ水平である。床面は、北側の一部で地山が露出している他は、白色粘土を塗布した貼床面と、日干し煉瓦を敷き詰めた面で構成されている。日干し煉瓦部分は、南側部分で 70㎝× 1.3m 幅で突出しており、この部分が出入口として機能したと見られる。遺構内外で柱穴は確認できなかった。また南西部で崩落した壁体の一部が出土している。

同遺構の周辺においては、窯址、炉跡、轆轤ピットや土坑址等、付帯施設が見つかっていない。遺構床面にも遺物が残存しておらず、その性格は特定できない。遺構埋土を含め、周辺から匈奴より新しい遺物がないことから、匈奴時代の遺構と考えられるが、日干し煉瓦敷の住居はこれまで類例がない。

匈奴時代の住居・建物遺構は、アバカン居館址、イヴォルガ城址、バヤン・ウンデル遺跡、ニジニィ・マンギルトゥイ遺跡、ボロー遺跡、ザーン・ホショー遺跡で調査報告が出されている。これらを見ると、匈奴の住居・建物遺構は、まず竪穴式と平地式の 2 種類に分けることができる。このうち大型・複室構造の建物遺構を除くと、以下のように特徴を整理できる。

竪穴式と平地式両者に共通する特徴としては、①平面形は方形、主軸を南北方向とする、②南側に入口を設ける、③板石組のカマド・煙道などの暖房施設を設ける、④カマドは屋内の北東隅に設置され、北壁・西壁沿いに煙道がめぐること、が挙げられる。次に、平地式固有の特徴としては、①土壁による壁建ち構造、内壁に壁柱をもつこと、②比較的大型であること、が挙げられる。

また竪穴式固有の特徴としては、①壁際に柱列をめぐらす、②切妻敷屋根が推定される、③床に貯蔵穴を持つ、と整理できる [19]。

これらの特徴と本例とを比較すると、暖房施設、竪穴状遺構として柱穴、貯蔵穴の欠如等と相違点が大きい。但し、南北方向を主軸とすること、南側入口などは共通しており、おそらくは他の匈奴の住居と共通した構造であったとみられる。上述既知の建物址は、いずれも居住用であることから、相違点は遺構による性格の違いであろうか。周辺状況の解明や類例の追加を待ち検討したい点である。また柱穴が見つかっていないため、簡易な上屋構造の切妻屋根を葺いていたと考えられようか。

2. ホスティン・ボラグ 2 遺跡 K 3 地点の調査

K1 以外の地点も、幾つかの周辺部分を試掘調査し、遺構の広がりを部分的に確認しており、2015 年には、このうち K 3 地点調査を実施した。表土を除去し遺構を確認した結果、この落ち込みが 5 基の土坑が重なったものであることが判明した (図 19~21)。各土坑は、段丘端の傾斜面において、地山の赤褐色土に掘られていた。いずれも内面に熱を受けた痕跡が見られず、窯址では無いことが確認された。土坑 1 は現存部を半裁し、堆積状況を確認したが他の土坑は、崩落部分で堆積を確認できるため、平面形状を確認するにとどめた。

土坑 1 ～ 4 からは、平瓦の破片を主体に、面戸瓦、土器、壁体の一部あるいは製作用と思われる指頭痕

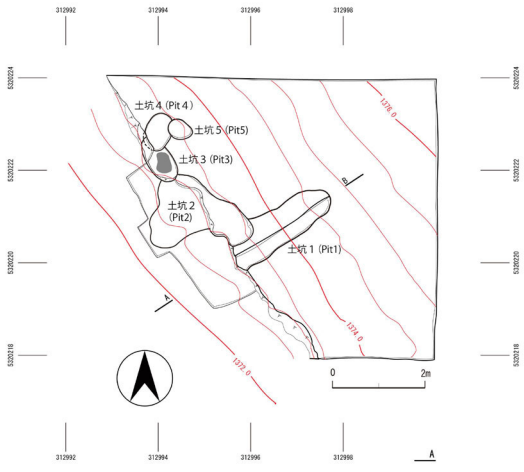


図 19　ホスティン・ボラク 2 遺跡 K3 地点



図 20　K3 地点完掘状況 (南から)

を有する焼けた粘土塊 (還元焼成) が若干出土したが、丸瓦はなかった。平瓦は、その凹面には平行叩き目を施すが、凸面は平行叩き目だけのものと、その上に隆帯や沈線を施すものがある。このことから、ある建物の屋根を平瓦だけで葺き、凸面に文様を有する平瓦を丸瓦位置に葺いたと考えられる。尚、隣接する K 4 地点からは文様塼の破片も採集され、地点による生産品の違いがあるらしい。

これらの土坑は、いずれも自然に埋土が堆積した痕跡が無く、炭化物・瓦塼片・土器片・壁体破片などが、無秩序に堆積していた。特に土坑２のようには比較的規模が大きいものも存在することから、近辺に存在した窯の操業に関わる廃棄物を投棄して、一気に埋めた土坑と考えられる。特に瓦片が多いことから、瓦窯が隣接して存在したものと思われる。このうち土坑 1 の遺構規模・形状や、瓦片が埋土の中位を中心に堆積する状況は、モンゴル・韓国が 1999 年に調査した瓦窯址と酷似する [20]。同調査では、瓦窯の燃焼部の一部が残存したものとされる。今回の調査成果からすると、これもまた廃棄土坑と捉え直した方が良いのではないかと考えられるが、この点は、匈奴時代の土器・窯址の調査を待ち、改めて検討してみたい。



図 21　K3 地点土坑 1(南から)

3. ホスティン・ボラグ３遺跡の調査

ホスティン・ボラグ２遺跡の西へ約 850m、モンゴル・韓国が 1999 年に調査した地点から西へ約 100m と近い地点でも、瓦・土器片、壁体の一部あるいは製作用と思われる指頭痕を有する焼けた粘土塊 (還元焼成) が比較的多く散布する場所を発見した。この場所をホスティン・ボラグ３遺跡として、2015 年から遺構の広がりを確認する調査を行っている。

現在までのところ、灰原と考えられる地点、窯址本体部分と考えられる地点を調査中である。遺物は瓦類が圧倒的に多く、その主体は平瓦片であり、このほかに若干の玉縁を有する丸瓦片と面戸瓦が出土している。文様塼も出土している。土器が少ないため、瓦窯址と考えられるが、調査の進捗状況に応じて随時報告したいと考えている。

Ⅳ . おわりにかえて

匈奴を巡る考古学的状況は、墓制を中心に進められてきた。無論これらの成果は大きいことは言を俟たない。一方、定着的な集落や城郭も存在する。後者は近年の調査で数も増加している。また農耕の存在、金属・窯業生産なども発掘調査で明らかとなってきている。これらは、どのように匈奴という遊牧社会に位置づけられるのか。性格の異なる遺跡群のセトルメント分析や、個別資料の分析を通じて、社会構造や経済基盤、生産力を解明することは、文献史料で強調されてきた匈奴の強大な軍事力を解き明かす点で重要であろう。

製鉄に関しては、上記の通り、西方の技術が紀元前 1 世紀には、生産システムとして匈奴社会内には完成しており、既に匈奴成立以前に定着していることが示唆される。窯業に関しては、その生産址については未だ調査に至っていないが、遺物から見る限り瓦生産、土器生産は「南」に位置する秦漢領域から得たものであることは明らかである。西方と南方の異なる技術が社会内に取り込まれており、この点で匈奴社会の複雑な成り立ちが伺えよう。現在のところ、瓦・土器生産は、南の帝国領の具体的にどの地域からどの時点で移入されたものか、まだ提示はできない。しかし現在、匈奴と秦漢の資料との比較検討を進めている中で、瓦については、秦漢の首都周辺の技術ではない可能性が高い見通しを得てい

る。匈奴の土器に関しては、初歩的な分析と編年構築がまず必要だが、仮に多くの研究者が指摘するようにイヴォルガ城址が古く、モンゴル国で見つかっている資料の多くが前漢末～後漢を中心とするならば、匈奴の土器における様式的・技術的な継承性は強固であり、また領内の斉一性も極めて高い。このことからは土器製作の専門集団を一旦取り込んだ後は、長期的に安定させながら、組織的運営を行っていたことが伺えよう。未だ多くの基礎的な分析や課題を残す分野であるが、これらの展望を持ち、調査を進めたいと考えている。

匈奴を研究する上で、①時期区分、②土器編年、③匈奴の故地、④農耕や狩猟の位置づけ、⑤土城や瓦葺建物の性格、そして、⑥そもそも考古学的に匈奴をどのように定義するのか、などの様々な課題が山積している。幸いにもモンゴルで興味深い遺跡を調査しているので、今後も遺跡の発掘成果を基点として研究を展開していきたい。

註：

1) Пэрлээ Х. 1961, *Монгол ард улсын эрт, дунд үеийн хот суурины товчоон*, УБ:Улсын Хэвлэлийн Хэрэг Эрхлэх Хороо.: тт.32-33. [ペルレー Kh.『モンゴル人民共和国の古代、中世都市研究の概要』]

2) Kato Shinpei et al, 1991, *Gurvan Gol: historic relic probe project : a report on the joint investigation under the Mongolian and Japanese*, Mongol Academy of Sciences and The Yomiuri Shimbum, Tokyo.: p.11

3) 대한민국 국립중앙박물관・몽골국립역사박물관・몽골과학아카데미 역사연구소 2001「1999 한 - 몽 공동학술조사 몽골 투브 아이막 뭉근 모리트 솜 이흐 후틀・호스틴 볼락 유적」『몽골 모린 돌고이 흉노 무덤』(한 - 몽 공동학술조사보고 , 제 2 책)[大韓民国国立中央博物館・モンゴル国立歴史博物館・モンゴル科学アカデミー歴史研究所「1999 韓 - 蒙共同学術調査 モンゴル トゥブ県(アイマク)ムングンモリト郡(ソム)イフ・ホトル、ホスティン・ボラク遺跡」『モンゴル モリン・トルゴイ匈奴墓』(韓蒙学術調査報告 第 2 冊)]

4) Амартүвшин Ч., Эрэгзэн Г., Батболд Н., 2011, *Төв аймгийн Мөнгөнморьт сумын нутаг дахь Хустын булагийн дурсгалт газарт ажилласан бэсрэг хайгуул судалгааны тайлан*, ШУА-ийн АХГБСХ.: pp.3-4. [アマルトゥブシン Ch.・エレグゼン G.・バトボルド N.『トゥブ県(アイマク)ムングンモリト郡(ソム)所在のホスティン・ボラク遺跡で行った小規模探査調査報告』]

5) Wright J., Honeychurch W., Amartuvshin Ch., 2009, The Xiongnu settlements of Egiin Gol, Mongolia, *Antiquity, vol. 83, Issue 320*.: pp. 372-387

6) Houle J-L., Broderick L. G., 2011, Settlement patterns and domestic economy of the Xiongnu in Khanui valley, Mongolia, *Xiongnu archaeology: Multidisciplinary perspectives of the first steppe empire in Inner Asia, (Bonn contributions to Asian archaeology, vol.5),* Bonn: Vorund Frühgeschichtliche Archäologie Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn.: pp.137-152.

7) Сунчугащев Я. И., 1979, *Древняя Металлугия Хакасии*, Ноб: Наука. [スンチュガーシェフ Ya. I.『ハカスの古代冶金』]

8) Murakami Yasuyuki, 2015, Our Cooperative Activity in The Republic of Khakassia and its Significance in the Research on the History of Iron Production in the Eurasian Continent, *Ancient metallurgy of the Sayan-Altai and East Asia, (Materials of the 1st International Scientific Conference, dedicated to the Memory of Doctor of Historical Sciences, Professor Yakov Ivanovich Sunchugashev)*, pp.21-24.

Амзараков, П. Б., 2015, Предварительные Итоги Исследования Памятника Древней Металлургии Железа Таштыкской Эпохи «Толчея», *Ancient metallurgy of the Sayan-Altai and East Asia, (Materials of the 1st International Scientific Conference, dedicated to the Memory of Doctor of Historical Sciences, Professor Yakov Ivanovich Sunchugashev)*, pp.98-106. [アムザラコフ P. B.「タシュティク期の " トルチェヤ " の古代製鉄遺跡研究予察成果」]

9)　7) と同じ。

10) Kozhenikov N. O., Kharinsky A. V., Kozhenikov O. K., 2001, An accidental geophysical discovery of an Iron Age archaeological site on the western shore of Lake Baikal, *Journal of Applied Geophysics, vol.47, Issue 2*.: pp.107-122

11) Харинский А. В., Снопков С. В, 2004, Произведство железа населением Приольхонья в Елгинское время, *Известия лаборатории древних технологий, вып. 2*, Иркутск: Изд-во ИрГТУ.: сс.167-187. [ハリンスキー A. V.・スノプコフ S. V.「プリオルホン流域のエルギン期の鉄生産」『古代技術研究所報告』2 号]

12) Давыдова А. В., 1995, Иволгинское городище, (Археологические памятники Сюнну, вып.1), СПб: АзиатИКА. [ダヴィドヴァ A. V.『イヴォルガ城址』(匈奴の考古遺 跡 ,1 巻)]

13) 笹田朋孝 2013「匈奴の鉄生産」『鉄と匈奴－遊牧国家像のパラダイムシフト－』(第 6 回東アジア古

代鉄文化研究センター国際シンポジウム予稿集)

Pohl E., Mönkhbayar L. et al., 2012, Production sites in Karakorum and its environment: A new archaeological project in the Orkhon Valley, Mongolia, *The Silk Road, vol. 10, Saratoga(U.S.A):*

The Silkroad Foundation.: pp.49-65

14) Амартүвшин Ч. нар, 2015, *Сэлэнгэ аймгийн Мандал сумын нутаг дахь Гацууртын орд, түүний орчны бүсэд хийсэн археологийн авран хамгаалах хайгуул судалгааны тайлан*, УБ, ТАХГБСХ. [アマルトゥブシン Ch. ほか『セレンゲ県(アイマク)マンダル郡(ソム)所在のガチョールト洞窟とその周辺で行った考古救護調査報告』]

15) 6) と同じ

16) Vincent S., 2013, Mètallurgie du fer, *L'habitat xiongnu de Boroo Gol, Recherches archèologiques en Mongolie (2003-2008), (Terra Archaeologica Tome VII)*, Suisse.: pp. 194-197

17) Sasada Tomotaka, Amartuvshin Ch., 2014, Iron Smelting in the Nomadic Empire of Xiongnu in Ancient Mongolia, *ISIJ International, Vol. 54, No. 5*.: pp.1017-1023

18) 下図は Эрэгзэн Г.[ред], 2011, *Хүннүгийн өв, Нүүдэлчдийн анхны төр-Хүннү гүрний соёл*, УБ. [*Treasures of the Xiongnu, Culture of Xiongnu, the first nomadic empire in Mongolia*] より。

19) 臼杵勲・佐川正敏・松下憲一 2017「匈奴の建物・住居について」『第 18 回北アジア調査研究報告会発表要旨』: pp.53-56.

20) 3) と同じ

以上の研究は、基盤研究 (A)「初期遊牧国家の比較考古学的研究」(JSPS KAKENHI Grant Number 26244048) による成果の一部である。

地名民俗学事始め
～地名研究の民俗学的着地点
地名から民俗学はできるのか～

吉松　高敏

Ⅰ. はじめに

地名民俗学という語はまだ熟語となっていない、聞きなれない。つまりはメジャーではない。しかも定義も明確ではない。学として認知されているのかもわからない。しかし、地名には人々の思いがこめられていることだけは確かで、新谷尚紀や関沢まゆみのいう「民俗学は伝承分析学」[新谷・関沢 2016] の対象となりうるはずである。

多くの地名は漢字で表記される。しかし、漢字の字面につられて解釈するものではなく、音声に戻して考える必要がある。それらのことを「地名民俗学事始め」として、以下に展開しようとするものである。

地名民俗学の定義や方法論は、かつて筆者が関わった『山口市史 史料編』民俗編の編纂作業の中で、民俗編の監修者であった伊藤彰との対話がもとになっている。このレポートは、地名民俗学の聞書といっても差し支えない。

山口では、明治の地番表示の前から存在する地名で、小字やそれより小さい範囲を示す小地名のことを「ホノギ」という。このホノギという称呼は西日本、とくに中国地方には多いようであるが、多くの広域地名が案外このホノギやそれよりやや広い地域に拡大した小字名を起源とすることが知られている。それを伊藤彰は「地名は面的に拡大する性質を持つ」[伊藤 2015: 53] と定義している。

小地名についての考証はあまりにローカルすぎて、果たして普遍の学となりうるであろうかという疑念がわく。本レポートの後半では山口の地名の個別解説が続くので、馴染みのない読者には苦痛かもしれない。しかし、個別のものを帰納してゆけば、おのずから普遍性をもったものが見えてくるというのが地名民俗学の醍醐味でもある。

伊藤の目指した地名研究は、氏の監修した『山口市史 史料編』民俗・金文編 (以下『民俗編』) に総括されている。監修者として、あるいは地名と民俗学の研究者としての伊藤の思考の軌跡が、まず循環する水のイメージを母体に総論として展開し、それに続く「地名と民俗」、「生活のリズム」、「暮らしと仕事」、「祈り」、「暮らし言葉」の各章となって、伊藤の地名民俗学の基層をたどることができる。

とりわけ、「総論」と「Ⅰ地名と民俗」は、伊藤の書き下ろしの原稿であり、地名民俗学の序論ともいえる論文である。それは未完成となったが、柳田國男と谷川健一の地名の研究を受け継ぐものとなるはずのもので、「これ (民俗編のこと) ができたら地名民俗学の本をまとめたい」という伊藤の言葉